

「探究」とは？「問い」とは？

研究推進部長 丹生 憲一

学力検査直前の2日間、「丹 BAL」の最後に特別講義を行いました。

3月8日(火)は高畑由起夫先生(関西学院大学フェロー)をお招きして、知の探究コース1年1組と2年1組の来年度グローバル選択者がお話を聴きました。高畑先生は数年前から本校の探究活動に関わってくださっています。

まず、**レポートの組み立て方**として「**ボトムアップ**」と「**トップダウン**」の二通りの組み立て方があること。初心者向けは「ボトムアップ」で、**とにかく書けるところから書いて、収集した事実から「仮説」を立てる**。それに対して、「トップダウン」では、まず全体像を考え、目次を決めてから本文を書く。自然科学での「理論的視点から仮説を定めて検証していく」段取りに近いという話をされました。集めた資料を分類して体系化する際には KJ 法が有効で、そこから**筋道(=ストーリー)を立てる**ことが重要だというお話もされました。本校の「地域課題から世界を考える日」の発表を聴いて思いついたストーリーの例に「**丹波布を用いて地域の活性化**」を「**チョコレートと児童労働やフェアトレード**」と**結びつける**というのがありました。1年生の皆さんは英語の授業で考えたことを思い出してください。一見、何の関連性もないかもしれませんが、以下が高畑先生の「ストーリー」です。

丹波布は綿に絹(くず繭)を織り込む技法が独特で、伝統工芸品としてその美を伝承しようと努められている。「くず繭」は、絹を生産する過程で生まれるが製品として出すことはできない。本来廃棄されるものを生産者が自分達の生活に活かす中で丹波布は生まれた。高価な絹が地元で使われることはない。ここにチョコレート生産に通じるものがある。かつての「絹・小豆・栗の丹波」対「皇族・貴族に献上される京都」、「ガーナなどのチョコレート生産国」対「ヨーロッパ・アメリカ・日本などの消費国」は、『生産者』対『消費者』の関係である。これらを比較するところに「グローバル」を考える意味はあるのではないかと。

次に、アンケート調査をする際の注意点についてお話がありました。①「**何のためにアンケートを行うのか**」ねらい・対象を明確にして「前文」に明記する。②「**属性(性別、年齢、居住地、職業)をきちんと問う**」(性別は、必ずしも答えを求めない)③「**一つの項目に対する問いは一つ**」④「**複数の設問を掛け合わせるクロス集計を用いる**」⑤「**統計結果からストーリーとなるものを導くこと**」。例えば、「自己肯定感を得られる人はどんな人か」を調査するとして、「女性」で「自分の好きなことをしていると感じている」人は「自分の長所も短所もありのままに受け入れている」というようなストーリーを読み取れるかどうか重要だという話をされました。

「**探究心が人生を拓く**」という一例に、阪急電鉄の小林一三氏の話が紹介されました。阪急といえば、今では関西を代表する私鉄ですが、若いころの小林さんは、「**何もない野原のようなところに新しい鉄道を敷く**」という「課題」に取り組みました。**使う人がいないのに、電車を走らせても儲かるわけではありません**。そこで考えたのは、鉄道敷設予定地周辺の安い土地を買い占めて、建て売りの住宅を建て、サラリーマンにローンを組んで売りました。彼らは通勤に電車を使わざるをえません。さらに、家にいる(当時は主婦が多かった)奥様方のために、電車の終点にはデパート(阪急百貨店)と宝塚劇場を建て、買い物や観劇の足としても使うように仕向けました。「**なにもないところに、なにかを作る**」という話は、「仕事がない(?)」丹波で何かを始めるヒントのように聞こえました。

一緒に次の問いを考えてください。(※講義中の質問と一部変えています。裏面最後に解説を…)

問1 靴の会社A社とB社の社員が、ある発展途上国の調査に行くと、その住民は皆、裸足で生活しています。

2人はそれぞれ本社に伝えました。

A社「ここはマーケットになりません」

B社「ここは素晴らしいマーケットです」

どちらが正しい資本主義の考え方だと思いますか？

2人は何故そう考えたのでしょうか？

問2 大、中、小と大きさの違う3つのりんごがあります。

これを3人で分ける時、あなたは どうやって分けますか？



3月9日(水)は1年生全員とグローバル選択者が、杉岡秀紀先生(福知山公立大学)のお話を聴きました。杉岡先生も文部科学省の指定を受けてから、知の探究コースの発表会で毎回助言をいただいています。

まず、「勉強」と「探究」は同じか?という問いから始まりました。結論から言うと、「勉強には正解がある」が「探究に正解はない」。高校での「勉強」ではいかに早く、効率的に正しく答えられるかが求められています(入試もしかり)。大学での研究や社会に出るからの問題はすべて「探究(研究)」にあたり、丹 BAL はその先取り・お試し・基礎体力作りをしているといえます。これからの高校に求められる力は①「何を理解しているか(知識・技能)」②「理解していることをどう使うか(思考力・判断力・表現力)」③「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか(学びに向かう力、人間性)」です。①は教科の「勉強」で身に付けられても②③の力を高めるには「探究」での学びが必要です。来年度からは全国の高校で総合的な探究の時間が必須となります。「先取りして学んでいる皆さんは自信を持ってよい」と激励していただきました。

次に「問いとは何か?」という問いがなされました。英語では question, problem, issue, theme, inquiry...と表現され、「日常会話における問い」「インタビューなどでの問い」「学校のテストや入試での問い」「アンケートの問い」「研究のリサーチエスション」「社会問題や組織の抱える問題」...と問いの場面も多岐にわたります。探究活動における「良い問い」とは、「思わず持ってしまった」疑問であり、「違和感を感じるもの」に対する疑問ということでした。「なぜ、女性の国会議員は少ないのだろうか?」「なぜ、受付というと女性を思い浮かべるのだろうか?」などがあります。「私の両親は、医師とピアノ教師です」というと、「お父さんがお医者さんで、お母さんはピアノの先生だ」と思いこんでいないか?「家事は女性がするものだ」という刷り込みがあるのではないかと問題提起されました。(これらが例に出されたのは、国際女性デーの翌日だったからでしょうか?)

また、「閉じた質問(はい・いいえで答えられる)」と「開いた質問(はい・いいえで答えられない)」について説明があり、「開いた質問」を「閉じた質問」に換える練習をしました。「なぜ、女性の国会議員は少ないのだろうか?」という問いを「女性の国会議員は、他国に比べて少ないのか?」のように書き換えます。同じ問いでも、開いた質問や閉じた質問を繰り返すことで、さらに疑問がわいてきて考えが深まるきっかけになるということでした。

最後に、豊岡市での事例が挙げられました。豊岡市では**若者が都市部に出て行って帰って来ない**という問題があります。しかし、「本当に帰って来ないのか?」と「若者回復率」のグラフを見ると、20代前半で男女とも減るのですが、30代前半に男性の52%が帰ってくるのに対して、女性は27%しか帰って来ないことがわかりました。「どこに原因があるのだろうか?」「収入に問題があるのか?」と年代別平均収入を男女で比べると、20代までそれほど差はなく、40代以降に200万円近い格差が生まれるということがわかりました。「雇用形態に差はあるのか?」と調べると、男性の82%は正規雇用であるのに対し女性の正規雇用は46%だということもわかります。「市役所の職員ではどうだろう?」とみると、男女別年齢構成グラフから、20~24歳(採用されるころ)の数は同じなのに、20代後半で女性が男性の半数近くまで減り、40代から60代にかけて3分の1、4分の1、5分の1と激減しています。「これはなぜだろう?」「女性の定年は早いのだろうか?」「女性が辞めざるを得ない雰囲気があるのではないか?」などさらに問いを重ねて、「女性が住みやすく、働き続けやすい町にするにはどうすればよいか」という問いに取り組みされているようです。

「課題を解決しようとして、すぐに解決できることなんてない。それでも、子の世代・孫の世代のために考え続けることが重要なのだ。」という言葉が印象に残っています。丹波地域のことも丹 BAL の授業で考えたぐらいで解決できることはありません。それでも、考え続けたら皆さんが社会に出て、…あるいはおじいちゃん、おばあちゃんになった時には解決できる…は少なくとも、現状維持ぐらいはできているかもしれません。その時まで、丹ばろう!

(※表面から)問1「資本主義的」なのはB社。新しい市場を作り出そうとするのが資本主義の発想である。

B社は「誰も靴を履いていないのだから、一人一足売っても儲かる」、A社は「靴の需要はない」と考えた。ただ、「貧しくて、欲しくても靴が買えない」という視点も必要…。

問2 「じゃんけん」「くじ引き」を選ぶ人もいるでしょう。「3等分に切って分ける」「ジュースやジャムに加工してから3等分する」「りんごを売って代金を分ける」という考え方もあります。

探究の問いにつなげると「平等とは何か?」「貨幣の役割とは?」「受け取った時の満足度は?」と膨らませることができる…とのこと。

